

[近現代編]

幕末・維新时期／明治・大正期／昭和時代

幕末・維新时期

廃藩置県と町村区画の変遷

幕末期の動乱の中で、大聖寺藩は、幕末の大聖寺藩随一の教育者であり、儒学者でもあった藩士、東方芝山を登用して、富国強兵策をとりました。また、慶応4年(1868)の戊辰戦争では、本藩である加賀藩の方針に従って幕府軍に与しようとしたのですが、鳥羽・伏見の戦いで幕府軍が敗れたことを知ると、やむなく新政府軍について北越戦争に出兵しました。なお、最後の第14代利嚳は、明治2年(1869)の版籍奉還で藩知事となりましたが、同4年(1871)の廃藩置県で職を解かれました。

明治4年7月に、明治新政府の廃藩置県により、大聖寺県が誕生しました。しかし、この年の11月には、金沢県に合併されたので、大聖寺県が在ったのは、僅か4ヶ月間のことでした。なお、金沢県も明治5年2月には石川県と改称したので、これ以降、当地は石川県江沼郡となりました。

このちは、江沼郡はいくつかの区に分けられ、さまざまな変遷がありました。明治11年7月にはようやく「郡」が行政区画として公認され、大聖寺に江沼郡役所が設置され、郡長が配置されました。また、郡のもとには、23ヶ所の「戸長役場」が置かれ、同17年には14ヶ所に統合されました。

明治22年には、明治政府による地方制度の総仕上げとして、市制・町村制が実施されました。これにより、江沼郡は1つの町(大聖寺)と24の村に整理されました。

パトロン事件

明治元年(1868)、大聖寺藩は官軍から弾薬(パトロン)の調達を命じられた際、その資金不足を補うために一步銀や銀の簪などを集めて、御城山(錦城山)下の洞穴で二歩金を偽造しました。この貨幣の偽造事件をパトロン事件といいます。藩は事件が発覚した翌2年に、市橋波江に全責任を負わせ、その切腹をもって終結させました。



大礼服姿の前田利嚳公
(江沼神社所蔵)



にせがね
贋金づくりの洞穴
(大聖寺地方町 錦城山)

浦上キリシタンの預かり

明治政府は、^{しんとう}神道国家を進めるために、キリスト教の国内布教を認めず、旧幕府同様の禁圧政策をとり、明治元年(1868)4月に、浦上(長崎)の信徒3300人余りを全国20の^{しよはん}諸藩に分けて^{はいる}配流することを決定しました。大聖寺藩では、50人のキリシタンを預かり、同3年(1870)1月に、大聖寺庄兵衛谷の^{しようべえだに}鉄砲場の長屋に収容しました。藩では、御預けキリシタンたちの^{かいしゅう}改宗を迫るため、藩内の各真宗寺院に^{せつゆ}説諭を命じました。説諭は数人ずつ分けて、各寺院に預け、僧侶らによって行われました。『大聖寺藩史』によれば、結局、50人のうち、5人が病死し、のこり45人のうち、改心した者は18人であったと記録されています。この浦上キリシタンは、同5年7月に金沢の^{うたつやま}卯辰山に送られましたが、この配流については、諸外国からの強い抗議もあり、同6年すべての信徒が釈放されました。



庄兵衛谷鉄砲場跡地
(大聖寺神明町)

みの虫一揆



新家理与門の碑(加賀市分校町)

明治4年(1871)11月、大聖寺県内で農民一揆が起きました。この一揆は、^{みのむし}胴ミノを着た農民の姿が^{あおち}蓑虫に似ていたので「みの虫一揆(明治一揆)」と呼ばれています。11月24日の夜、農民たちは^{うちこししょうこうじ}打越勝光寺の門前に集結し、大聖寺^{そぜい}県の租税係などをして役人たちの家を次々と打ち壊しました。翌日には農民およそ千人が^{しきじむら}敷地村の端で^{あおち}青池^{だいさんじ}大参事に七か条の要求をつきつけました。その主な内容は、大聖寺藩が赤字財政を^{ほてん}補填するためにとった増税策に対する見直しや十村役の廃止などでした。この一揆に対して大聖寺県はやむなく兵士を出動させ発砲したので、農民1人が死亡し数人が負傷しました。やがて農民たちは退散し、同日の深夜、一揆は^{ちんてい}鎮定しました。この一揆では8人から9人が逮捕され、^{しゅぼうしゃ}首謀者であった^{かみぶんぎょう}上分校村の^{あらいえり}新家理与門は、翌年6月、金沢の刑務所で^{よもん}獄死しました。現在も分校町には、明治28年に江沼郡の町村長が^{ごくし}発起人となって建てられた理与門の石碑があります。

明治・大正期

明治天皇の北陸巡幸

明治11年(1878)5月23日、明治政府は太政官布告で天皇の北陸道・東海道の巡幸

を行なうことを発表しました。巡幸は右大臣岩倉具視や参議大隈重信らに従え、総勢 798 人という空前の人数でした。

8月30日に東京を出発し、富山県（当時は石川県）に入ったのは9月28日でした。一行は金沢に3日間滞在し、この間、天皇は石川県庁で県令より県治事業の概要などを聴き、産業などの公益功績者の具申を受けました。そのなかには、製茶の渡辺宗三郎や琵琶湖に汽船を走らせた石川嶂、九谷焼画工の浅井一毫など、大聖寺の人たちもいました。10月6日には、小松の串茶屋村から動橋村に入り、その日の午後到大聖寺町に到着しました。敷地村では、前田利豊をはじめ、錦城、有隣の両小学校の児童たちが出迎えを行い、行在所となった錦城小学校には急遽「御座所」がつくられ、その部屋で休憩されました。その日のうちに、行列は従来からの北国街道ではなく、明治9年にできたばかりの熊坂新道を通して福井の方へ向かいました。



明治天皇行在所記念碑
(加賀市立錦城小学校)

加州松島社と鉛筆製造

明治8年(1875)に、富士写ヶ岳山麓の片谷村で良質の黒鉛が発見されました。この黒鉛を利用して鉛筆製造をしようと考えたのが、旧大聖寺藩士で、当時、大蔵省の役人をしていた飛鳥井清



柿沢理平の墓
(大聖寺下屋敷久法寺)

でした。彼は、この鉛筆製造を窮乏していた旧大聖寺藩士の士族授産の一助にしたいと考えたのでした。ちょうどこの頃、オーストリアのウィーン万国博覧会(明治6年開催)で鉛筆製造の技術を学んできた井口直樹の指導

を得ることができ、明治10年(1877)12月、飛鳥井は旧藩士の柿沢理平を工場長にして「加州松島社」という会社を大聖寺松島町に創設しました。理平はさまざまな工夫を重ねて、ついには同16年オランダのアムステルダム万国博覧会で第一級第一等賞を獲得し、舶来品に劣らない良質の鉛筆を大量に作り出すことに成功しました。これは、同20年に三菱鉛筆の創始者真崎仁六が鉛筆の製造を始めた時よりも4、5年早いことになります。大聖寺山ノ下寺院群の一つ、久法寺境内には鉛筆製造に生涯を捧げた柿沢理平の墓があり、その戒名には「制鉛院造筆日肇居士」と刻まれています。



飛鳥井清

九谷焼の振興

明治9年(1876)に大聖寺の大沢十次郎は、アメリカ合衆国独立100周年を記念して

開かれたフィラデルフィア万国博覧会に江沼郡の九谷焼や製茶を出品するために、金沢の貿易商、^{えんなかまごべい}円中孫平とともにアメリカに渡りました。帰国後、横浜に店舗を開き、九谷焼や漆器、製茶などの郷土の物産を販売しました。同11年にはシカゴに支店を設け、販路を拡大しました。一方、大聖寺の井上商店（屋号「陶源」）も山中漆器や九谷焼を海外に輸出する貿易商として活躍していました。とくに、海外の需要に基づき江戸時代の中頃の^{そめにしきいまり}染錦伊万里の写しを大量に生産しました。これらの焼物は、仕上がりが大変良く、「^{だいしょうじいまり}大聖寺伊万里」と呼ばれて、江沼郡における九谷焼業界の隆盛を築くもととなりました。



大聖寺伊万里

大正期の織物工場
(大聖寺町)

絹織物業と製糸業の発展

江戸時代より、庄や大聖寺において生産された絹織物は、近代以降も江沼郡における最も重要な工業製品でした。なかでも、真っ白で肌ざわりのよい「羽二重」と称する製品は福井県や石川県の特産品となり、高い生産額を誇っていました。江沼郡では主に大聖寺で生産されたため、「^{だいしょうじはぶたえ}大聖寺羽二重」として全国に知られ、海外にまで輸出されました。その後、粗悪な製品を出したことで評判を落としたり、大聖寺の大火により多くの工場や事務所を焼失したりしたために、一時、生産が振るわなくなった時期もありました。その後、^{しのはらとうべい}篠原藤平や^{しみずこうへい}清水孝平、^{とよだなべきち}豊田鍋吉などの大聖寺の機業家たちの努力により、大聖寺の絹織物は再び隆盛をむかえました。

一方、^{ようさん}製糸業は、^{ようさん}養蚕の副業として江戸時代から行われていましたが、明治15年(1882)に郡内に2ヶ所の製糸伝習所を設けたことで発展の基礎が築かれました。

同36年(1903)には郡立製糸伝習所が設置され、製糸業は郡内一円に広まりましたが、大正中頃からはしだいに衰退していきました。

リム・チェーンの製造

当地は全国でも有数の、バイク、自動車、機械などのリムやチェーンの部品製造の拠点地となっていますが、そのきっかけとなったのは^{あらいえくまきち}新家熊吉という1人の漆器職人の力によるものでした。

初代新家熊吉は元治元年(1864)に、山中村で漆器木地を挽く職人の家に生まれました。16歳のとき、すでに家業を継ぎ、すぐれた技術を身につけて、家業を成長させました。明治32年には漆器を輸出するために中国やロシアなどに出かけましたが、その旅先



新家熊吉像 (山中温泉)

で見た自転車に強い関心をもちました。それは、自転車の車輪（リム）が木製であり、その製造に漆器製造の技術が役立つのではないかと考えたからでした。

明治36年（1903）に、熊吉は従業員15名で自転車の木製リムを製造する会社「新あらや家しょうかい商会」をつくりました。新家商会の木製リムは、ほとんどの国産の自転車リムに利用されるまでに成長し、大正2年（1913）には、鉄製リムの生産に切り換えるなど、新家商会はこの分野では日本有数の会社にまで発展しました。この新家商会がもとになり、その後、いくつかの変遷を経て、現在の大同工業株式会社（加賀市熊坂町）や新家工業（大阪市中央区）となりました。

大聖寺博覧会の開催

「大聖寺博覧会」は、明治12年（1879）の4月から5月にかけて、15日間にわたり、大聖寺の錦城小学校と遷明中学校の2ヶ所を会場に盛大に開催されました。この博覧会は、旧大聖寺藩の家老前田幹や権大参事飛鳥井清らが企画したものです。明治維新後の江沼郡における初の博覧会の開催であり、石川県内でも明治5年の金沢展覧会、同7年の金沢博覧会に次ぐ早い時期の開催でした。



「大聖寺博覧会記事」
（国立国会図書館所蔵）

大聖寺川を利用した水力発電事業

明治15年（1882）に、日本で最初の電灯事業が始まって以後、電力需要は徐々に高まり、当地にもその波が押し寄せてきました。同44年（1911）に、電力の必要性をいち早く感じていた北前船主たちが中心となって、「大聖寺川水力発電株式会社」が創立されま



大聖寺水力発電所が在った付近
（山中温泉大聖寺川上流）

した。山中町に発電所を作り大聖寺や山中・山代の温泉地へ電力供給を始めたのです。一般家庭への電灯供給が第一の目的でしたが、この地域ではそれ以外にも特殊な需要がありました。山中・山代の温泉旅館が電灯を必要としていたこと、大聖寺を中心とする機織業や新家商会などを中心とした企業などが電気動力を必要としていたこと、さらには当時すでに山中、大聖寺間と山代、動橋間を結んでいた馬車鉄道を電化するために発電が急がれていたという背景がありました。

大津事件と北ヶ市市太郎

大津事件とは、明治24年（1891）年5月に日本を訪問中のロシア帝国の皇太子ニコライ（のちに帝政ロシア最後の皇帝となったニコライ2世）が、今の滋賀県大津市で、警備にあっていた巡查・津田三蔵に突然斬りかかられ負傷した暗殺未遂事件のことをいい

ます。この時、津田を組み伏せ、サーベルを奪い、皇太子ニコライの命を救ったのが、ニコライ一行の人力車の車引きをしていた北ケ市市太郎がいちいちたろうともう1人の車夫、向畑治三郎むかいはたじさぶろうの2人でした。北ケ市市太郎は江沼郡庄村字加茂あざかも（現在の加賀市加茂町）の出身で、身長は2メートル近くの大男で、同20年に29歳で京都に出て人力車の車夫になったと伝えられています。事件後、この2人は一躍、救国の英雄として全国から注目を集めることになり、政府から年金36円が支給されただけでなく、ロシア政府から当時の金額で2500円の報奨金と1000円の終身年金が与えられました。その後、市太郎は郷里、江沼郡に帰り、同32年の郡会議員選挙に出て当選し、郡会議員を務めるなど郷土の名士となりました。しかし、その後、日露戦争がおこると、彼はロシアのスパイと非難を受けることとなり、寂しい人生をおくりました。



北ケ市市太郎寄進灯ろう
(加賀市加茂町白山神社)



明治期の人力車
(モース・コレクションより)

八十四銀行の創業と破綻

明治11年(1878)11月に、大聖寺だいはちじゅうしこくりつぎんこうに第八十四国立銀行が設立されました。当時は、金禄公債きんろくこうさいを資本金として全国に150行余りの国立銀行が設立され、八十四銀行はその一つでした。その後、八十四銀行は本店を東京の京橋に移し、大聖寺をただ一つの支店として経営を続けました。同30年5月には、酒問屋を経営していた東京の中沢彦吉なかざわひこきちが譲り受け、八十四銀行は普通銀行に移行しました。その後、大聖寺のほかに、東京に5ヶ所の支店を設け、首都圏における二流銀行としての地位を築きました。



八十四銀行本店建物
(大聖寺鍛冶町)

八十四銀行が順調に営業を続けていくことができたのは、創業地である大聖寺支店での織物業主や北前船主らの多額の預金を背景とした高い業績のためと言われています。

ところが、関東大震災や世界恐慌とそれに伴う大聖寺の織物業の不振などのあおりを受け、八十四銀行は昭和2年(1927)3月に突然の休業に入りました。これにより、江沼郡では八十四銀行への取り付け騒ぎがおきました。郡役所や大聖寺町、大聖寺商工会は預金者への救済に乗り出しましたが、営業再開の目途はたちませんでした。結局、昭和3年、いくつかの休業銀行を整理統合した昭和銀行しょうわぎんこうをあらたに設立することで解決が図られました。半世紀にわたって江沼郡の金融を支えてきた八十四銀行はついにその姿を消しました。

片山津温泉の発展



片山津温泉縁起略図（部分）
（「加賀の文化」第7号より）

片山津温泉は、承応^{じょうおう}2年（1653）に、のちに大聖寺藩^{としあき}2代藩主となる前田利明が柴山瀧に鷹狩りに訪れた際、水面に水鳥が群れていたことから湖底の温泉を発見したことが始まりと伝えられています。その後、幕末から明治初年にかけて温泉の掘削^{くっさく}を試みた記録がいくつかありますが、いずれも安定した湯量を確保することはできませんでした。

明治9年（1876）に、当時、県の役人であった近藤幸即^{こんどうこうそく}らが柴山瀧で大規模な埋め立て工事を行ない、その結果つくられた人工島に橋が架けられ、ようやく人々が温泉に入浴できるようになりました。明治15年（1882）6月28日には、石川郡観音堂村から井戸掘りの森仁平^{もり に へい}を招き、特殊な工法で掘削し、湯量を確保することに成功しました。のちに、片山津温泉では、この日を開湯記念日として「湯の祭り」が始められるきっかけとなりました。

議会と選挙

明治政府は明治22年（1889）2月に大日本帝国憲法（明治憲法）^{だいにっぽんていこくけんぽう}を公布し、翌年11月に第一回帝国議会^{ていこくぎかい}を開きました。以下、帝国議会・県会・郡会・町村会について簡単に見ていきましょう。

【帝国議会】帝国議会は、衆議院（定員300人、任期4年）と貴族院（任期7年）の二院で構成されていました。衆議院の選挙資格は、直接国税15円以上を納める25歳以上の男子に限られていました。貴族院は、皇族・華族や天皇の選任による勅撰議員と多額納税者^{ごせんぎいん}の互選議員で構成されていました。衆議院選挙では明治23年の第1回で相川久太郎（無所属）、同27年の第3回で梅田五月（自由党）、同35年の第7回、同36年の第8回、同37年の第9回、同41年の第10回で上出長次郎^{かみ でちようじろう}（政友会）、同45年の第11回で相川久太郎の江沼郡関係者がそれぞれ当選しました。貴族院では同37年に広海二三郎^{ひろうみにさぶろう}（瀬越村海運業）、同44年に大家七兵衛^{おおいえしちべえ}（左同）が互選議員に選ばれました。

【県会】府県会は、明治11年の府県会規則に基づき翌年4月から開設されました。その選挙資格は同年が地租5円以上納税の20歳以上男子、同32年が直接国税3円以上の納税者となっていました。江沼郡の議員数は初め3人、同40年に2人となりました。江沼郡選出議員は延べ24人で、その中で梅田五月（大聖寺町長）、西田彦平（三木村長）、稲手吉五郎（分校村長）、稲葉市次郎（作見村長）、坂野忠宗（黒崎村長）、本川進（東谷口



梅田五月銅像
（大聖寺地区会館前）



江沼郡役所建物（大正 12 年頃）

ろう くぼひこべえ
郎・久保彦兵衛・坂野忠宗・稲葉市次郎・本川進・篠原藤平などは著名な議員でした。

村長)などは著名な議員でした。

【郡 会】郡会は明治 11 年に正式な行政区画となっていたものの、その機能を本当に果たすのは同 32 年頃からでした。郡会は初め村会の複選議員（任期 6 年）と大地主の互選議員で組織されていましたが、同 32 年の改正で複選制を廃止し、議員数を大聖寺町 3 人、他町村 1 人ずつ、任期 4 年と決めました。西田彦平・稲手吉五郎・北ヶ市市太

きた がいちちた
きたが いちちた
きのほらとうべい
きのほらとうべい

【町村会】町村会は明治 12 年の町村会規則に基づき 1 年に 1 回、1 回に 3 日以内と定められました。これ以前、同 6 年頃には地方官と戸長の事務打合会的な区会がありました。町村会は同 21 年の市制・町村制や同 23 年の府県制の制定によって、公法人の町村の議決機関、監査機関、行政裁判機関の地位をもち、運営も議会として体裁を整えました。議員は土地や家屋の所有者から選ばれ、これは地主議会の性格が強いものでした。

町村の財政

ここでは町村制施行後の 1 町 24 ヶ村で構成する江沼郡全体の町村財政を、明治期と大正期について概観しましょう。

【明治期】明治 25 年（1892）の財政をみると、歳入は基本財産収入、雑収入、前年度繰越金、国庫交付金、県税交付金、寄付金、町村税、郡費など合計約 4 万 819 円でした。町村税は各町村で歳入全体の約 80% を占めていました。町村税には個別割、地価割、営業割の 3 種類（国税や県税の付加税）があり、個別割収入が約 60% を占めていました。歳入規模は大聖寺町が 6558 円で最も多く、これに山中村、山代村、東谷奥村・塩屋村・篠原村・三木村などが続きました。



大聖寺町役場建物

（上段は大正期の役場建物。昭和 9 年の大火で焼失した。下段は大火以後に再建された。）



旧町村役場資料
（加賀市立中央図書館所蔵）

一方、歳出は役場費、会議費、土木費、教育費、衛生費、救助費、警備費、勸業費、諸税及負担など合計約 3 万 9204 円でした。教育費は歳出全体の約 46%、ついで役場費が約 34% を占めました。つまり、経費の大部分は小学校や夜学校の経営と町村役場の人件費、物件費に使用されました。歳出規模は大聖寺町が 6181 円で最も多く、これに山中村、山代村、瀬越村・月津村・作見村・動橋村などが続きました。各町村では小学校費（約

70% が教員給料）の財源として授業料や町村税のほか、寄付金や雑納税を充てました。

【大正期】大正 9 年（1920）の財政をみると、歳入は基本財産収入、使用料・手数料、前

年度繰越金、町村税、交付金、補助金及奨励金、寄付金、公債及繰越金、雑収入その他など合計約 54 万 1044 円でした。町村税は各町村で依然として歳入全体の約 75% を占めていました。国庫交付金は同 7 年に教員俸給の一部を国が負担する制度が実施されたため、その比重が大きくなりました。町村税は明治末期から政府が市町村の付加税を認めたので、付加税の種目が増加しました。なお、大聖寺町では独立税として特別税の賦課が認められました。各町村税の実収額は総額 40 万 8752 円に達し、明治 25 年の約 40 倍近くとなりました。

一方、歳出は役場費、会議費、土木費、教育費、衛生費、警備費、勸業費、諸税及負担（郡費）、基本財産及積立金、神社費、その他支出など合計約 51 万 2219 円でした。教育費と役場費の合計比重は歳出全体の約 43% で、町村制施行直後の 80% に比べて半減していました。これに対して、土木費、衛生費、警備費・雑支出などの比重が高まりました。とくに、郡費は明治 25 年の 5% から 17% に上昇しました。住民 1 人当りの支出額も、明治 25 年の 63 銭 6 厘から 9 円 30 銭に上昇しました。

近代の教育

明治政府は明治 4 年（1871）7 月に文部省を設立し、同 5 年 8 月にフランスをモデルとした学制を公布しました。この内容は全国を 8 大学区に分け、各大学区を 32 中学区、各中学区を 210 小学区に分けて、全国に 5 万 3760 の小学校を設け、小学・中学・大学と一貫した教育制度を確立する計画でした。石川県では同 6 年に区学校規則を定め、江沼郡を第 2 大学区 23 中学区とし、学校の設立を推奨しました。



明治期・動橋小学校授業風景
（写真集「加賀・江沼」より）

江沼郡では同年に錦城・京達・有隣・旗陽の大聖寺 4

校をはじめ、塩浦（塩屋）、竹浦（瀬越）、三木、対溪（長谷田）、山中、脩来（塔尾）、開陽（山代）、勅使、那谷、打越、動橋、玄笠（七日市）、保賀、尚禮（片山津）、北浜（橋立）、とくち、しのはら、しばやま、得知（篠原）、柴山などの 21 小学校が設立されました。同 7 年には南郷、新知（作見）、月津の 3 小学校と、我谷、大内、枯淵、風谷、真砂、坂下、小杉などの巡回授業所が開設されました。小学校は統廃合や



明治 11 年頃の錦城小学校建物

名称の変更が随時行われたため、その沿革や校数は必ずしも明確ではあまりせん。ともあれ、江沼郡には同 13 年までに小学校が 40 校ほど設立されました。

当初、その校舎には寺院や民家などが多く充てられ、教師には旧藩士や神官・僧侶などが多く採用されました。文部省は同 5 年 9 月に小学教則を公布し、小学校を上等 4 年（6

～9歳)と下等4年(10～13歳)の8級(8年制)に分け、授業期間を6ヶ月間とし、日曜日を除き1日5時間、1週30時間の課程としました。当時の教科書は欧米文化を紹介した啓蒙書や翻訳書が多く、とくに理科や世界地理が重視されました。就学率は同6年に28%でしたが、同10年には40%となりました。

中学教育では明治8年3月に旧藩邸に^{きゅうはんてい}変則^{へんそく}中学校が創設されましたが、わずか4ヶ月で廃止されました。ついで同11年6月には、八間道に^{はちけんみち}郡立^{ぐんりつ}遷明^{せんめい}中学が設立されましたが、これも同19年に廃止されました。その後、大正12年(1923)に至り、^{じゅうか}県立大聖寺^{だいせいじ}中学校が設立されました。女学校はこれより早く、明治44年に^{じゅうか}郡立^{ぐんりつ}実科^{じつか}女学校(のち^{じゅうか}県立大聖寺^{だいせいじ}高等女学校)が設立されました。

近代の戦争と犠牲者

金沢に歩兵第七連隊が^{れんたい}配置されたのは明治8年(1875)9月のことで、この連隊が初めて戦闘に参加したのは、^{さつま}旧薩摩藩^{さいごうたかもり}を中心とする士族が^{よう}西郷隆盛^{せいごうたかもり}を擁して起こした同10年の「西南の役」でした。西南の役は明治期最大の士族反乱で、この戦いにおける石川県の戦没者は459名と極めて多く、この後、勃発した日清戦争での犠牲者の2倍にもなっています。なお、この西南戦争における^{じゅうぐんしゃ}江沼郡出身^{えいそ}の従軍者は75名で死者は8名でした。

明治27年(1894)の日清戦争は、日本が^{たいがいせんそう}中国大陸や朝鮮半島で行った大規模な^{たいがいせんそう}対外戦争でしたが、この戦争での石川県全体の戦没者は197名で、このうち江沼郡出身者は19名でした。

明治37年(1904)の日露戦争においては、その犠牲者は日本全体で6万人を超え、日清戦争とは比較にならないほどの犠牲を^{こうむ}被りました。江沼郡出身の戦没者も211名にのばりました。

昭和16年(1941)12月の日米開戦から同20年の敗戦までの間、太平洋戦争で犠牲となった石川県関係の戦没者は2万2788人という大きな数となっており、このうち江沼郡出身の戦没者は1536人でした。



加賀市忠霊塔(大聖寺錦城山麓)

北陸線の開通と電車網の整備

明治26年(1893)に、敦賀から富山までを結ぶ、^{ふせつ}国営による北陸線の^{ふせつ}敷設工事が始まりました。同30年には福井・金津などを経て、大聖寺・小松に至る工事が完了しました。大聖寺駅がオープンしたのが、この年の9月20日で、当日、大聖寺駅構内には多くの人々が押し寄せて、警官や駅員がその整理にあたり、列車が到着すると大歓声があがり町民こぞって大喜びしたと伝えられています。

ところで、江沼郡に北陸線が開通したことで、本線から奥まったところに位置していた



山中馬車鉄道
 (「写真集加賀・江沼」より)

山中温泉で山中馬車鉄道株式会社が設立され、同 33 年 5 月から山中温泉と大聖寺駅を結ぶ 8.6km の馬車鉄道が開通しました。引き続き、同 43 年に山代温泉と動橋間が、大正 3 年には動橋と片山津温泉間を走る馬車鉄道がそれぞれ開通し、江沼郡内における北陸線と各温泉地を結ぶ交通網が完成しました。なお、大正元年(1912)9月には山中馬車鉄道は山中電気軌道と社名を改め、石川県内で最初の電化を実現しました。これを機に、山代や片山津の各鉄道馬車も

温泉電気軌道株式会社として運営が一元化され、加賀温泉郷を結ぶ路線すべてが電車に切り替わりました。以後、この電車は、昭和 17 年(1942)までの約 30 年間にわたって「温電」の名前で愛され続けました。

昭和時代

新憲法と選挙

幣原内閣は GHQ (連合軍総司令部) と何度も交渉を重ね、国会の論議を経て昭和 21 年(1946)11月3日に「日本国憲法」を公布しました。その最大の特色は、主権在民、基本的人権の尊重、平和主義にありました。

新しい衆議院選挙は昭和 21 年(1946)4月に行われました。石川県は全県 1 区で定数 6 名に 34 人の立候補者がありました。大聖寺町出身の竹田儀一は戦前からの実績で当選しました。翌年 4 月の総選挙からは、金沢以南江沼郡までを 1 区、河北郡以北を 2 区と改めました。竹田儀一は同年にも当選し、国務大臣や厚生大臣として国政に参与しました。同 24 年の総選挙には三木村出身の坂田英一が初当選し、以後 7 回も当選、同 40 年には農林大臣として、わが国農政の推進者となりました。同 27 年の総選挙には東谷奥村出身の辻政信が初当選、以後 3 回当選、さらに参議院全国区議員にも当選して、名参謀の名を政界にも残しました。

憲法とともに公布された地方自治法も、旧法の官治的性格を捨て真に民主的なものになりました。同 22 年 4 月には新法に基づく地方首長選挙や町村議会議員選挙が行われ、全国各地に新町村長や新町村議会議員が生まれました。なお、同 29 年には大聖寺町長のリコールが成立しました。



坂田栄一



竹田儀一

江沼郡の農地改革

政府はGHQの指令に基づき、昭和22年(1947)から同25年まで農地改革を実施し、3年間で19万7000町歩の農地を買い上げ、小作人に売り渡しました。その結果、自作農数は改革前の284万戸から541万戸へと飛躍的に増加し、小作率は45.9%から8.3%に激減しました。



柴山潟干拓による水田地帯
(加賀市柴山町)

石川県では昭和22年から同28年まで1万299町歩の農地が、延べ5万1054戸の地主から買収されました。この買収面積は、小作地総面積の75.4%に当たりました。江沼郡でも同期間に1081町歩の農地が、延べ5710戸の地主から買収され、5295戸の農家に売り渡されました。その結果、小作地は23.2%から8%に、小作農家も11%から5.7%に減少しました。買収面積は月津村・片山津町・動橋町・矢田野村・山代町などで多くみられました。

永小作地は加賀の江沼郡・能美郡と能登の羽咋郡・鹿島郡に多く、江沼郡では三谷村・勅使村・山代町・片山津町などに多くありました。なお、柴山では地租改正後の明治19年(1886)と、農地改革後の昭和26年に地割(田地割)を実施しました。これは柴山潟の排水が土砂で閉塞されて水面が上昇し、田地在り水害に見舞われたためです。

福井震災と郷土

戦災の記憶がまだ覚めやらぬ昭和23年(1948)6月28日の夕方、福井県坂井郡丸岡町(現在の福井県坂井市丸岡町)付近を震源とする大地震が発生しました。地震の規模はマグニチュード7.1でしたが、きわめて浅い直下型地震であったため、江沼郡内でも大きな被害がでました。とりわけ大聖寺町、三木村、瀬越村、塩屋村など、福井との県境に近い町村の被害は甚大でした。結局、江沼郡全域では、死者39名、負傷者451名、住宅全壊791戸、半壊1231戸をはじめ、北陸線の断絶、牛の谷トンネルの崩落をはじめ、各地の橋が落下するなど、多くの被害をだす未曾有の大惨事となりました。



福井震災による被害の様子(大聖寺八間道)

学問と芸術

鳥羽・伏見の戦いで幕府軍が敗北するや、大聖寺藩は、当初の幕府側から一転して新政府側につきました。この間、政治的には主体的な動きができなかったこともあり、その分、教育の振興や学芸の奨励に力をいれました。

幕末、大聖寺藩は優秀なる藩士を多数、大坂の緒方洪庵の適塾や江戸の福沢諭吉の英学塾、安積良斎が指導する塾をはじめ、金沢や越前大野、長崎などに派遣しました。

また、最後の藩主、14代前田利鸞も漢学や歌道、絵画、書道、茶道、能楽など幅広い教養を身につけ、とくに能楽では宝生流を極め、素人ながら芝公園能楽堂の舞台にも立ち、また謡二百五十番を諳んじていて、どんな曲でも求められれば即座に歌うことが出来たといわれています。利鸞の努力もあり、この後、大聖寺では錦城能楽会が誕生し、宝生流の能楽が伝承されるきっかけとなりました。



中谷宇吉郎



深田久弥

当地域のこうした学芸を尊ぶ風潮は、明治、大正、昭和と受け継がれ、哲学者の木村素衛や憲法学者の上杉慎吉、考古学者のみつもりさだお、科学者の中谷宇吉郎や大幸勇吉、作家の深田久弥、生物学者の木村有香、医学者の桂田富士郎、本川弘一、歌人の西出朝風などを輩出する要因ともなりました。

加南線の廃止と加賀温泉駅の誕生

大正元年（1912）から30年間にわたって親しまれてきた「温電」は昭和17年（1942）に北陸鉄道株式会社に吸収合併され、それ以後は「北陸鉄道加南線」として加賀温泉郷を訪れる観光客の足として活躍し続けました。

このころ、山代温泉や山中温泉、片山津温泉の宿泊客は、北陸線の大聖寺駅か動橋駅で降車をして加南線に乗り換えて各旅館に向かいました。

ところが、当時、国鉄では特急や急行の停車駅を一本化することで準備に入り、最終的には大聖寺と動橋の中間の作見駅を、加賀温泉郷の統合駅とすることに決定しました。その結果、昭和45年（1970）、北陸線作見駅が、特急・急行が停車する「加賀温泉駅」としてオープンしたのです。

これにより、北陸線の大聖寺駅や動橋駅には特急や急行が停車しなくなり、そのため加南線の利用者が激減しました。また、バス路線の充実やマイカーブームのあおりで、電車利用客が減少していたこともあり、ついに、昭和40年（1965）9月片山津線の廃止、昭和46年（1971）7月、山代・山中線の廃止をもって加南線は姿を消しました。以後、加賀市の交通体系の中心は、加賀温泉駅を基点としたバス運行に切り替わったのです。

片山津・動橋間の加南線電車
（昭和30年頃 動橋駅）

加賀市の誕生



加賀市制発足祝賀会
(錦城小学校講堂)

政府はシャウブ^{かんこく}勸告を受けて町村合併の気運を盛り上げ、昭和28年(1953)9月に町村合併促進法^{そくしんほう}を制定しました。石川県は当初、大聖寺、山中、山代、片山津の4ブロック試案を支持していました。同29年3月には県内トップを切って大聖寺町が瀬越村を編入、片山津町が篠原村を編入、同年11月には動橋町と分校村が合併しました。同30年1月には山代町と勅使村・東谷口村が合併、同年4月には山中町と河南村・西谷村・東谷奥村が合併、矢田村・

月津村(字柴山を除く)・那谷村が小松市に編入、柴山が片山津町に編入されました。この結果、同29年度末には、それまでの21町村から大聖寺町・山代町・山中町・片山津町・動橋町・橋立町・三木村・三谷村・南郷村・塩屋村の6町4村に整理されました。

しかし、財政が逼迫^{ひっぱく}した町村ではさらなる合併を望む意見もあり、江沼郡全体を1つの市にできないかという声次第に高まりました。昭和31年4月には郡町村議長会でも全員がこうした考えに賛同し、一本化を町村会に申し入れました。同年8月には、ついに江沼郡の10町村を1つの市とするべく第3次試案が県において提案されました。同年12月には、態度を決めかねていた山中町を除く9町村長および議長が「加賀市建設委員会」を結成しました。山中町に対しては、同32年3月に知事勸告^{かんこく}、同年12月に内閣総理大臣の合併勸告も発せられましたが、ついに同意を得るには至りませんでした。結局、昭和33年(1958)1月に、山中町を除く9町村の合併により「加賀市」が誕生しました。加賀市は石川県で6番目の市制成立となりました。同年2月には初の市長選挙が行われ、山中町出身で大同工業社長の新家熊吉^{あらいえくまきち}が当選しました。ついで、同月には市内9ブロックの選挙区から28人の市議会議員が選出されました。

なお、平成17年(2005)10月に加賀市と江沼郡山中町が合併し、新加賀市が成立しました。



加賀市新庁舎完成
(昭和35年6月)